

特集

ソメイヨシノ、 青函に咲く

桜とリンゴの赤い糸

春、函館市の五稜郭公園と青森県弘前市の弘前公園では、
千本以上のソメイヨシノが咲き誇り、荘厳な美が人々を魅了する。
桜守として奮闘する樹木医を訪ね、桜とリンゴ栽培のつながりをたどった。

リンゴと関わりのある弘前れんが倉庫美術館では、桜の写真も紹介する展覧会が始まる。
北海道新幹線がつなく青函は、桜とリンゴの赤い糸で結ばれているようだ。

五稜郭公園の歴史は、江戸時代末期、箱館の開港に伴い、幕府が外国との交渉や蝦夷地の防衛を担う箱館奉行所を設けたことに始まる。周囲には日本初の西洋式土塁がめぐらされ、稜堡という五つの突角がある形から五稜郭と呼ばれた。桜の苗木が植えられたのは、公園

五稜郭公園は約千五百本ある桜のほとんどをソメイヨシノが占めている。北海道に多いヤマザクラ系は花と葉が同時に出るが、ソメイヨシノは花が散った後に葉が出る。だからこそ、満開時に混じりけのない花だけの荘厳な光景となつて人を酔わせるのだ。ソメイヨシノは江戸時代末期から明治初期、染井村（現・東京都豊島区駒込・巣鴨付近）の造園師や植木職人によって育成された。最新の遺伝子研究の結果、エドヒガンとオオシマザクラの雑種が交雑してできた一本の木が始まりで、人が挿し木や接ぎ木によって増やしてきたクローンであることが明らかになっている。

桜は永遠を生きる

（写真上）五稜郭公園のソメイヨシノ。1914年に植えられた桜が残っていれば、樹齢110年が最高齢となる。公園内には復元された箱館奉行所があり、この地で展開した幕末維新の激動を今に伝えている。4月下旬撮影。写真提供＝渡辺展崇

文＝北室 かず子
写真＝田淵立幸

として一般開放された一九一四年（大正三）と、北洋漁業再開記念北海道大博覧会の一九五四年（昭和二十九）などで、樹齢六十〜七十年の桜が多い。

五稜郭公園を管理する一般財団法人函館市住宅都市施設公社の樹木医、齋藤保次さんは「桜は手入れをすればするほど応えてくれます。中でもソメイヨシノは期待を超える美しさで、訪れた方々を笑顔にしてくれます」と言う。取材に訪れたのは一月末。雪に埋もれた公園は深い眠りに入っているが、樹木医の仕事に中断はない。「冬は冬季剪定^{せんてい}があり、造園会社が行う剪定方針を決定して、不良枝が残っていないか、チェックします。モットーは、木くばり、心くばりですね。春になれば一つの花芽にいくつ蕾^{つぼみ}が付くか花数調査をする。花数は桜の健康のバロメーターになるとか。夏はカミキリムシやコスカシバなどの害虫による被害を点検する。全国のソメイヨシノを苦しめる「てんぐ巣病^{てんぐすびょう}」の桜を切った鋸^{のこぎ}は毎回、殺菌消毒を行うように指導するのも大切な



五稜郭タワーから眺めた桜の季節の五稜郭公園。4月下旬撮影。写真提供＝五稜郭タワー

仕事だ。秋にはキノコを重点的に見る。胞子が空中を浮遊すること、で他の桜が罹患^{りかん}するのを防ぐため、切削し、殺菌、コーティングする。さらに、土壌改良も大事だ。割った竹筒を土に挿す方法で、土の通気性、透水性を改善する。

「自然界では落ち葉が腐葉土となり、養分を木に再吸収させるサイクルが成り立っていますが、都市公園では落ち葉は掃除されるのでサイクルが機能しません。花を咲かせる行為は木にとって非常に体力を使う活動ですから、衰弱した桜の体力を補うために人の手による施肥が重要になってきます」。五稜郭公園では二〇二〇年（令和二）六月に「サクラの木へお礼肥^{れいひ}」プロジェクトが行われ、のべ四百人がボランティアで施肥作業に汗を流した。

五稜郭公園では、二〇二一年に全ての桜のカルテが作られ、翌年から治療が始まった。齋藤さんが秘密兵器を見せてくれた。樹木を傷つけることなく内部の腐朽率を測定できる機械だそうで、人間でいうとCTスキャンだろうか。桜



齋藤さんは札幌市出身。小学生の頃から木が好きで木工クラブ部長だった。会社勤めの傍ら高尾山（東京都）などで森林インストラクターとして活動し、都立公園の管理の仕事を通して樹木医を志した。



左から、（一財）函館市住宅都市施設公社の渡辺展崇（わたなべ ひろたか）さん、齋藤さん、加藤匠（かとう たくみ）さん。老木の美しさ、健やかさを保つべく、一丸となって取り組んでいる。



樹木医・齋藤さんの道具。左から、打音で異常を調べる木槌。健全な木は木魚のような硬い音、腐った木は濁った鈍い音がする。台形皮むき・ナイフ型フラン病削り・荒皮削りの3点は病気や害虫の食痕を削る。幹に刺して感触を調べる銅棒（こうぼう）。腐った箇所を目安に使うピンボール。幹周りを測る巻き尺、危険箇所の目印にする識別テープ。

人も精密検査が健康の鍵だ。
ところで、樹木医の齋藤さんに教えてもらいたいことがある。かつてソメイヨシノ六十年寿命説が流布したが、本当なのだろうか。「ソメイヨシノは特に注目されている樹木ですから、たまたま枯れたものが人の目に触れて短命説がひとり歩きしたと思われる。アスファルトに囲まれて根が十分に張れなかったり、道路脇で排気ガスを浴びたり、光害で休眠不良に陥ったりしたのでしょう。日本三大桜と呼ばれる樹齢千年以上の山高神代桜、根尾谷の薄墨桜、三春の滝桜はすべてエドヒガンで、ソメイ



真冬の園内を点検する齋藤さん。コスカシバという蛾の幼虫の食害痕などを切削する。

イヨシノはその血を引いています。きちんと管理すればソメイヨシノは長生きしますよ」と、短命説を



樹木を傷つけることなく、内部の腐朽率を精密診断できる機器。

力強く打ち消してくれた。「それどころか、永遠に生き続ける可能性も秘めています。切り株から新し

い芽を出して再生する萌芽更新や、地上部の幹から出た不定根が地面にたどり着いて養分を吸収し幹化すること、元の幹が腐っても生き続ける力があるのです。弘前公園には推定樹齢百四十三年にもなるソメイヨシノもあります。弘前では、剪定、施肥、薬剤散布を三本柱として、積極的な外科的手術、不定根の保護、土壌改良を施す桜の管理法が生み出され、「弘前方式」として全国をリードしているそうだ。齋藤さん自身も弘前に赴いて学んできたという。

リングの技術を桜に

弘前ではどんな思いで桜が守られているのだろう。五稜郭公園と弘前は鉄路でつながっている。五稜郭駅から、はこだてライナーで新函館北斗駅へ。北海道新幹線が青函トンネルで津軽海峡の海底を突き抜け、約一時間で新青森駅に到着。屋敷森を背負った民家が新幹線の車窓に見え、昔話のような情景にほっこりと心温まる思いがする。新青森駅からは奥羽本線の

快速で弘前まで約三十分だ。函館と弘前は実に近い。

弘前公園は弘前藩主津軽家の居城・弘前城の敷地が、公園として開放されたもので、約二千六百本の桜が咲き誇る。ソメイヨシノは約千七百本で、そのうち約四百本が樹齢百年を超えているというから驚くばかりだ。四月になれば、江戸時代の天守や櫓などの歴史的建造物と桜が溶け合う。これを「弘前方式」で守っているのが、樹木医三人と約四十人の現場職員からなる「チーム桜守」だ。樹木医の橋場真紀子さんは、こう語る。「弘前方式の基本理念は木の若返りです。枯れた枝はもちろんですが、生きている枝も切ることです。若枝が育ち、葉がたくさん付きます。桜は切り口から病気にかかりやすいため大胆な剪定はタブーとされてきましたが、昭和三十年代に樹勢が衰えた桜の枝を切る剪定を施したところ、回復しました。これはより多くの果実を実らせるために枝を切るリング栽培の技術を参考にした管理方法です。さらに、リングは樹高を低く、枝が横

橋場さんは青森県大鰐町(おおわにまち)出身。樹木医を志して東京からUターンし、弘前市公園緑地協会(現・弘前市みどりの協会)に勤務しながら樹木医になった。最低でも1日1回は園内を見回る。治療法に悩んだ時は現場に出ると手がかりが見つかるという。

●弘前公園／弘前市下白銀町1
☎0172-33-8739(弘前市公園緑地課)



弘前公園には写真の追手門をはじめ5つの櫓門(やぐらもん)があり、天守とともに国の重要文化財となっている。
写真提供=弘前観光コンベンション協会



に張るように剪定することによって実の収穫がしやすくなり、日光も均等に当たするため、生育がよくなります。桜も、樹高を低く抑える剪定によって低い枝の日

当たりがよくなり、葉の生長が促され、花数が増える。手が届くほど近くで重厚感のある花を見られるのは、そうした剪定法の賜物だ。歴史を振り返ると、一七一五年(正徳五)に弘前藩士が京都から



1810年(文化7)に再建された弘前城天守に桜が映える。幕府が天守建築を制限していたにもかかわらず焼失した天守を再建できたのは、鍛冶地警護の貢献が認められ、海防に必要な「櫓」という名目を通ったためである。
写真提供=弘前観光コンベンション協会



弘前公園の三の丸にある弘前市緑の相談所では園芸に関する約900冊の本や雑誌を閲覧できる。橋場さんは3年で全て読破して知識を蓄えた。



弘前七輪咲き桜。例年4月20日頃の開花前が見つけやすい。写真提供＝弘前観光コンベンション協会

二十五本のカスミザクラを持ち帰ったのが弘前城の桜の始まり。幹の腐りは進んでいるが、三百年以上、花を咲かせ続けている。

明治維新後の廃藩置県で津軽公が東京へ去ると、侍は禄を失い、主なき城は荒れた。県職員になった旧藩士の菊池楯衛は、現・北海道七飯町にある幕府の農業試験場（後の開拓使七飯官園）に赴き、アメリカ人技術者からリンゴの接ぎ木技術を学んだ。窮乏する旧藩士の生活をリンゴで支えようとしたのだ。その菊池が、一八八二年（明治十五）、城内に千本の桜を植えた。その中の一本が弘前公園最長寿のソメイヨシノである。

来てくださるのは、弘前でなければ見られない桜があるからです。これぞ弘前という桜の姿を作ります。そして、花をたくさん咲かせることに重点を置いています。ふつう一つの花芽に三〜四個の蕾が付きますが、弘前公園では平均四〜五個となっています。七つ付くものもあって、弘前七輪咲き桜と呼ばれています。花芽をつける時期に、適切な種類の肥料を与えること、また、薬剤散布により健全な葉を保つことも大事なんです」と、橋場さん。

北海道七飯でリンゴ栽培を学んだ菊池楯衛が、リンゴ王国青森の礎を築いた。そしてソメイヨシノを植え、約百五十年後の今、菊池

が端緒を開いたリンゴ栽培の技術が桜の若返りに生かされている。北海道と青森、リンゴと桜は、赤い糸で結ばれているようだ。

元シードル工場的美術館

さて、二〇二〇年（令和二）、青森のリンゴの歴史にゆかりの深い建物、美術館に生まれ変わった。吉野町煉瓦倉庫を改修した弘前れんが倉庫美術館である。吉野町煉瓦倉庫は明治時代から大正時代にかけて建設され、戦後は国内初の大々的なシードル（リンゴの発泡酒）工場として使われた。工場が閉じた後、建物の活用が検討されるなか、弘前市出身の美術家・奈良美智さんの展覧会が三度開かれ、十五万人以上が訪れたことがきっかけとなって、文化の交流拠点としての整備が始まった。そして、「記憶の継承」と「風景の再生」をコンセプトにした現代アートの展示空間が誕生した。元シードル工場という特徴的な空間で、地域の創造的魅力を再発見するプログラムや、トークイベント、ライブも

行われている。

四月六日から九月一日までは「蜷川実花展 with EIM: 僕くも煌めく境界」が開かれる。同館広報チームの大澤美菜さんいわく、「写真家・映画監督の蜷川実花さんが弘前に足を運んで撮影した



1. シードルの色にちなんだシードル・ゴールドのチタン材の屋根。
2. シードル工場の時代を物語る展示。敷地内のカフェではアップルパイやシードルを味わえる。



弘前れんが倉庫美術館 広報チームの大澤さん。同館には奈良美智さんの《A to Z Memorial Dog》も常設展示。



参考図版 蛭川実花《Untitled》2022年
©mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

桜の写真をはじめとする、人の手とまなざしに育まれた花や木々を捉えた作品群です。人間と自然が築いてきた関係性を浮かび上がらせ、それぞれが住まう土地の自然やその背景にある文化、歴史を新たな視点から捉え直す機会となることを目指したものです。人の手が育む



参考図版 蛭川実花《Untitled》2023年
©mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery



参考図版 蛭川実花《花、瞬く光》2022年
©mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

花や木々、人と自然が築く関係性。それは菊池楯衛や現代の桜守の営みにも通じる。弘前の桜から、蛭川実花さんはどんな表現を生み出したのだろうか。

函館の樹木医・齋藤さんは「弘前公園で見られる七輪咲き桜が、五稜郭公園でも昨年ようやく確認できました」と声を弾ませる。弘前では「七輪咲き桜を見つけた夜に見た夢は、そっくりそのまま叶う」と言われているとか。春爛漫の青函を旅して、七輪咲き桜を探してみたい。